（記

［タイム］ 遡行開始(8:55)→右沢分岐(9:40)→橋(10:45)→源頭の湿原(11:15)→稜線(11:20)

栗子川左俣右沢

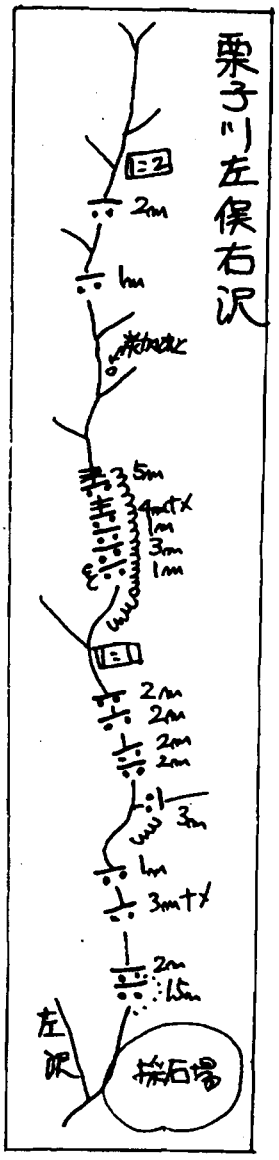
1990年9月24日
L

稜線上は見通しがきかず，木の上に登って現在地を確認してから，11:40下降開始。まだ充分に育ちきらない樹林帯を５分も下ると，沢の源頭に出た。

急傾斜であるが滝のかからない沢が続く。ぐんぐん下ってゆくと，左岸に炭焼き釜跡があった。炭焼き釜があるのだから，踏跡でも残っているかと探したが，それらしいものは見当らず，そのまま沢の下降を続ける。

やがて１～５ｍの小滝が５つ連続する地点に出る。ここがこの沢の一つのハイライト（もう一つは最後に出現した15m滝）。最初の５ｍは，右岸を樹木につかまりながら下る。そのあとの４ｍおよび３ｍの滝はクライミングダウンとなった。

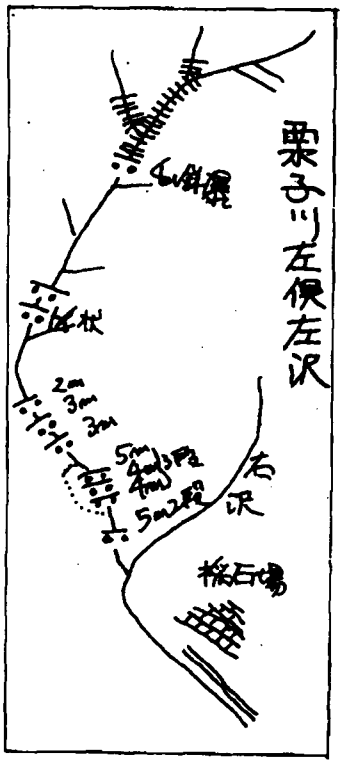
このあとはポツリポツリと小滝が出てくるものの，概して平凡な下りが続いた。やがて採石場で動いている機械の音が聞こえてくる。もうすぐ下降終了となるぞと考えていたら，突然目の前が切れ落ちた。15mの滝。左岸の急傾斜の斜面をブッシュや樹木を利用しながら下る。最後の華ともいうべき滝だった。あとは採石場から押し出されてきた石を踏みながら下り，左沢との合流点の直前で左岸の道路に上がる。下降終了13:30。　　（記・　　）



［タイム］ 下降開始(11:40)→下降終了(13:30)

栗子川左俣左沢

1990年9月23日
L:



砕石場は休みでゲートが閉められており，出合までずっと歩くこととなった。8:15遡行開始。すぐ5m2段の滝。そして4，4，5mと続く3段の滝。ここは左から捲く。このあとも2～3mの滝が連続する。

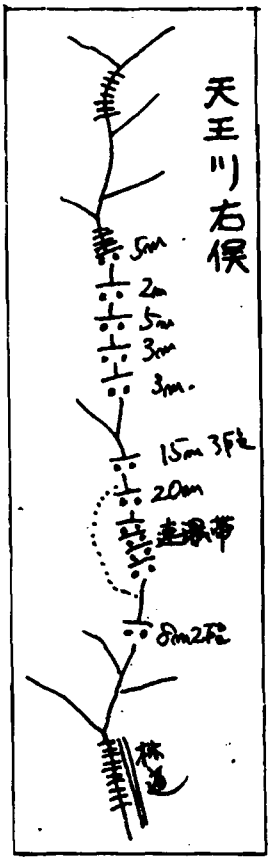
9:20二俣。この後は水量少なく，平凡となる。天王川を下降するためには，1127m独標につめあげてから下降するのが一番合理的だが，沢が貧弱になって，地図と対照できない。結局ヤブをこいで稜線にでたが，現在地がよくわからない。やむを得ず，近くの高みにむけてヤブこぎを続行する。どうやら1161m独標の近くまでつめ上げたようで，大変なヤブこぎを強いられてしまった。（[illegible]）

［タイム］ 砕石場(8:15)→二俣(9:20)→稜線(10:30)

天王川右俣

1990年9月23日

L. [illegible]



栗子川左俣左沢の遡行終了後，現在地確認のため，稜線上で2時間ものヤブこぎに悪戦苦闘して，ようやく天王川の下降に移る。

沢に降りたのが12:30。二俣を過ぎると急に滝が連続し，クライミングダウンを強いられる。やがて3段15mの滝が現われる。それを降りると20m滝である。これは，その下の小滝の連瀑帯とともに，右岸を捲いて下る。途中炭釜の跡を見つける。昔はこのあたりまで来て山仕事をしていたことが偲ばれる。

2段8mのナメ滝を過ぎると沢も穏やかとなり，14:10二俣を過ぎる。このあと沢は緩いナメ状となり，やがて踏跡が続くようになった。（記 [illegible]）